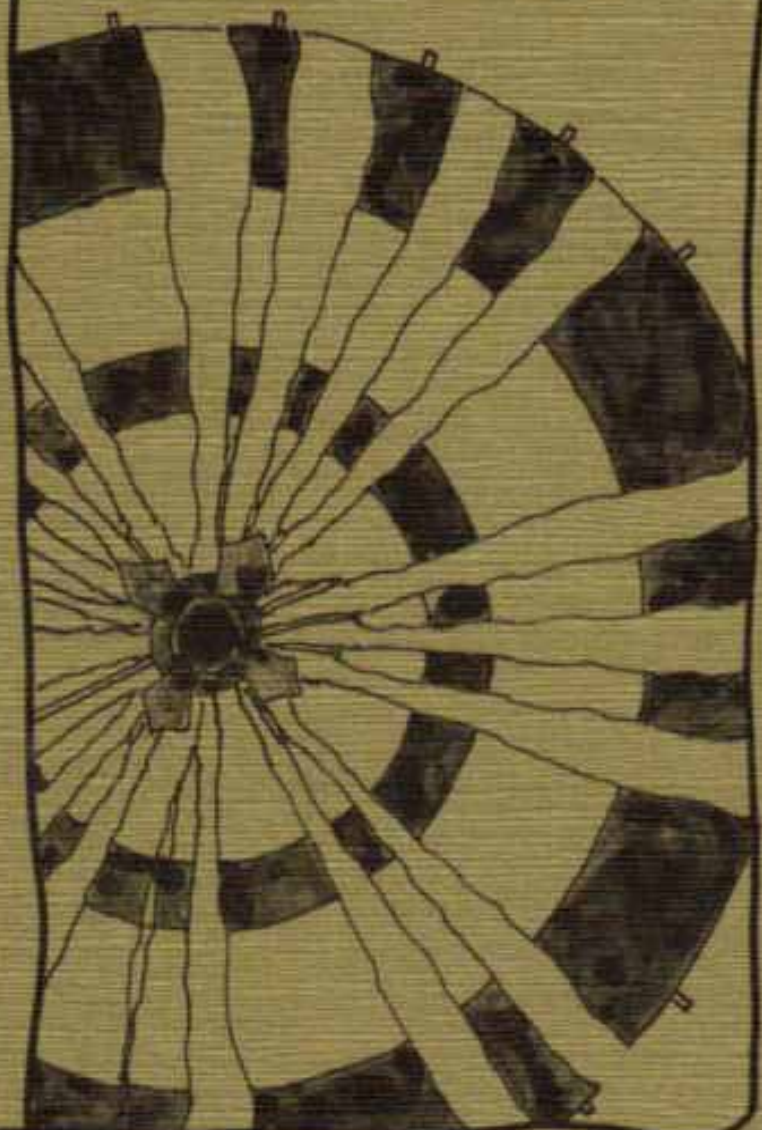


やぶれ傘



一一八号
二〇二二年十月

舟ゆらしとほりゆく舟草の花 根橋宏次

秋の蚊のゐる脱衣所でありにけり きくちきみえ

パーマ屋の中が見えたす秋の暮れ 大島英昭

露の夜のラヴェルの「夜のガスパール」 藤井美晴

蒸かし語ほつぽつ食つて午後も四時 青谷小枝

川沿ひの道十六夜の月あかり 廣瀬雅男

両隣とも満開の百日紅 丑久保勲

住職は留守みんなが鳴いてゐる 瀬島酒望

その辺と言へば川べり秋夕焼 白石正躬

あかんぼをみんな見てゐる秋の昼 小山よる

今日の月下に団地と森がある 渡邊孝彦

かなかなや夕餼は妻と二人して 秋山信行

大皿に盛る菜園の衣被 天野美登里

稲架組めば立山連峰ありありと 安藤久美子

きりぎりす子の手にじつとゐる 有賀昌子

抄 集 句 傘 紀 大 崎

枝豆を茹でる電話がなつてゐて 木村瑞枝

草市は橋のたもとで終りけり 倉澤節子

ワイパーを上げて中古車灼けてゐる 小泉里香

英会話教室の窓夜半の秋 柴崎和男

練り硬き印泥をねり秋の声 中島和子

八月の鉄柱を塗るニッカーズ 貫井照子

門ごとに迎火を焚く漁師町 野口希代志

めまとひをはらふ帽子の鏝かたし 萩原溪人

新蕎麦が出来ましたとのハガキ来る 萩原久代

冷やかや胸に吸ひ付く聴診器 武藤節子

高架線の駅の灯りや夜の秋 村田 武

鶏頭の花真つ赤つか触れてみる 森 美佐子

青簾抜けて風くる台所 山本久枝

たちまちに夕立の音に包まるる 浅嶋 肇

枝豆や昭和歌謡を聞きながら 泉 一九

木村瑞枝

水貝に箸つけるころ雨の音
井戸端の桶にトマトがぼこぼこと
暮るころ避暑地のカフェに小雨きて
秋の午後胴着担いだ女子生徒
掃苔の帰りの坂で雨となり
枝豆を茹でる電話がなつてゐて
鮭小屋にざあざあと雨降つてゐる

倉澤節子

草市は橋のたもとで終りけり
スケボーの音カタカタと秋の雲
切株に曲り胡瓜が置かれをり
工場跡地ひめむかしよもぎ伸び
数珠玉のこぼれてゐたる校舎裏
台風来音大生がチエロかつぎ
秋夕焼テニスコートに鴉二羽

黒澤次郎

止んですぐまた降る雨や凌霄花
あさがほや幼児は母とかがみ見る
俄か農土曜日曜秋耕す
飛行機雲北へひと筋ナナカマド
園児らの届く高さに青ぶだう
斑猫といつもの路を共にゆく
法師蟬の声聞きにゆく並木路

小池一司

ゆきあひの空に群れ飛ぶ赤とんぼ
足柄の峠越えくる秋の風
ぬか漬けの色深まりし秋茄子
早起きの窓辺に鳩と秋の風
木星も輝く今日の良い夜かな
小さめの釜で焚き上げ栗ご飯
柚子挽ぎし手に柚子の香の残りたる

ワイパーを上げて中古車灼けてゐる
 小泉里香
 足元に青柿落ちてゐるベンチ
 飲み残す二百十日の缶コーヒ
 今日月の五分遅れのバスが来る
 レジ横のポテト買ひ足す夜の秋
 校庭にからの鶏小屋鳳仙花
 小鳥来る歌ひながらの窓掃除

小卷若菜

小流れの橋を渡つて麻暖簾
 橋くぐる笹船を追ふ夏帽子
 熱帯夜の空をチカチカ何か行く
 ぼんやりと上弦の月秋暑し
 花カンナ遠く白波見えてをり
 秋海棠に触れて裏木戸くぐる猫
 歩を止めて法師蝉鳴き終へるまで

坂本和穂

寝苦しき夜にどつと雷が
 尾瀬沼に映る燧ひ岳ちと水芭蕉
 庭先の孫のこゑ聞き西瓜切る
 クラス会開けぬままに今年酒
 けふの月手を洗ひつつ眺めけり
 雨上がりに朝かから騒ぐ雀
 墓参り線香点し渡す母

佐藤稲子

土砂降りにはバシツと鳴りて秋の雷
 烏瓜の花のいくつか既に実も
 あめんぼう行き交ひ水輪行き交へる
 澄む池に映る弁天堂の赤
 街道の火の見櫓に赤とんぼ
 店頭にはバケツ鬼灯どつさり
 電柱にからむ花葛甲斐の道

魚沼の棚田水澄み畔厚し
増反の田に水汲めばやんま来て
特攻の「行きます」の声甘藷畑
ガマに滴り閑かなる摩文仁の地
ためらふも田に案内す送り盆
パパアに餓死軍医の伯父の敗戦日
夜濯や作業衣に泥田のにほひ

眞田忠雄

八月の新橋にある古銭店
出し抜けに雨降る夜に蟬のこゑ
大昼寝老いても子には従はず
長き夜や「ナースコール」に触れもせず
英会話教室の窓夜半の秋
秋の夜子規に銀河の句の多し
鰯雲「家族葬で」と知らせ聞く

柴崎和男

一駅で降りる客あり冷房車
サングラスはづして道を尋ねけり
電線の影さへ拾ひゆく暑さ
物置の錠前錆びて秋きたる
新蕎麦のうんちくを聞く昼の酒
鯛のちつちと鳴いて鳴き始む
見沼田に遠く群れ飛ぶ稲雀

高橋均

スクランブルの人混みを抜け秋の風
人肌の恋しくなりて温め酒
触覚を風にふるはせ秋の蝶
雨上がりが名月映す水溜まり
黒塀を曲がつた先に後月
徳利からとくとくと今年酒
父と子のバトンタッチだ運動会

高橋宜治

川わ八雨 山鷺
尻つ月あむ葵草
のとのがや田に
流る柱庭に水静
灯子塗す乳ひ風
月の二なるむや来
大のッカ花夏十り
海衣一茗荷朝一度け
へ被ズ荷朝度り

貫井照子

練秋炎^{ひよつとこ}血挽子足
り出男ののぎに元
硬水の中背の絵のた渡に
き中州をかくれしきまふ黒葡萄
印泥を光る忘れもの
秋の秋祭

中島和子

ひき地星星 傷夜
とり方飛月つは
りぎ紙ん夜いた涼
居のす広で単百屋魚屋見当たらず
老信げてや名前出ぬ会話
いた濃読めば虫の
る報読ば虫の
友読む虫の
と読む虫の
衣時間

手島百合子

今朝の秋まなうらに佇つ笠智衆
部屋灯りともる朝五時夏の果て
桐箆筒の奥に臍の緒終戦日
ベビーカーに立ち乗りする子台風過
街角に戻る騒^{ぞめ}きや阿波の夏
舗装路を横切る蜥蜴朝まだき
夏の雨空き家の軒に眠る猫

竹内文夫

ガタゴトと路面電車やライラック
山開きヘッドランプは一列に
魔法瓶の氷カラカラ夏の山
白南風や田んぼアートを高みより
葉生姜の山積生姜祭りくる
門ごとくに迎火を焚く漁師町
秋暑し素足で歩く石畳

野口希代志

萩原溪人

めまとひをはらふ帽子の鏝かたし
汗を拭きふきつつ歩む一万歩
煮浸しの鰯ののりし冷し蕎麦
岩棚に透かし百合咲き沖に船
アスファルトを割つて咲きぬる月見草
猫じやらし女釣師の竿しなる
稲雀飛び越えて行く大鉄塔

萩原久代

午前四時鳴き出す蝉に起こされて
端居する四人の友のひとり減り
早出して開く音聞く蓮の花
ぶだう狩大きな秤置いてあり
烏瓜の花を探して藪の中
子がメロン送りきてまた着払ひ
新蕎麦が出来ましたとのハガキ来る

橋本美代

軽鴨巢立ち寺僧は池の手入れする
立秋や胃腸の調子戻り来る
送る身は今年も墓所に芋殻焚く
外階段に力尽きたる秋の蝉
一升の米粉を月見団子とす
再会を約せしままに秋彼岸
秋陽差す階段使ひ筋トレス

◇ 11月・12月の句会案内

月	日	時	句会名	会場	連絡先
11月	1日火	AM9:00	こなから会	あいパル	WEP編集室
	1日火	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島英昭
	2日水	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン8	丑久保 勲
	4日金	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	4日金	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン1	秋山信行
	19日土	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	26日土	AM10:00	楽天会	あいパル	廣瀬雅男
12月	2日金	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	2日金	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン1	秋山信行
	5日月	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン2	丑久保 勲
	6日火	AM9:00	こなから会	あいパル	WEP編集室
	6日火	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島英昭
	17日土	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	18日(日)	AM10:00	吟行会(下記注)	WEP俳句教室	丑久保 勲
	24日土	AM10:00	楽天会	あいパル	廣瀬雅男
	24日土	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室

〔注〕ぎんなん会は奇数月は第1水曜、偶数月は第1月曜です。

12月18日(日)の吟行。

集合 10時、地下鉄・銀座線「外苑前駅」改札口。

吟行地 神宮外苑・銀杏並木→タクシーで新宿御苑・千駄ヶ谷門。

新宿御苑を過ぎり大木戸門→WEP。

句会場 WEPのあるマンションの7階会議室。

◎連絡先 秋山信行 ☎048-874-0555 藤井美晴 ☎0422-55-2733
 大島英昭 ☎048-592-5041 WEP編集室 ☎03-5368-1870
 廣瀬雅男 ☎048-443-7522 丑久保 勲 ☎048-853-3856

銀杏を踏みきたる靴臭ひぬる
 せうらぎの流れたまに葛の花
 午後から見はるは秋祭り
 秋雲に眼隠れする国秋祭り
 そこここにえはるの脱け殻終戦日
 信号の変わった顔に合間に汗拭ふ
 日焼けした顔にマスクの紐の跡
 濱野新

放課後のバトン練習 雲
 母屋へとは名月を背に車椅子
 きつちりと更地を揃へし芋殻焚く
 秋高し更地となりし角の店
 小さな手の返へし上手や阿波踊
 席ひとつ空けて冷酒を酌み交はす
 駄菓子屋の日の下の忘れ物
 日高みち子